

ローマ8章14-25節 「栄光の望み」

1A 子としてくださる御霊 14-17

2A 栄光のための苦しみ 18-25

1B 被造物の呻き 18-22

2B 体の贖いの望み 23-25

本文

ローマ人への手紙 8 章 14 節から読んでいきたいと思います。私たちの学びは、これから「栄化」の内容に入っていきます。「栄化」とは、私たちが神の栄光の姿に変わることを意味します。神が初めにアダムを造られ、ご自分の形に造られたのですが、その形に回復することを意味します。

私たちは、ローマ 6 章から「聖化」について見てきました。聖化とは、罪の罰から私たちが救われただけでなく、罪の力から救われているという良き知らせのことです。聖なる者となる、聖められるということで、罪から離れ、神のものとして生きることを意味します。それは、キリストに結ばれている、キリストにつながれているということから可能になるものでした。キリストが死なれた時に私たちの古い人、罪に支配されていた人が死に、そして甦られた時に新しい性質、新しい命が与えられたという真理です。もう既に罪に対して私たちは死んだ、言い換えれば、罪に支配された生活との関わりは自分から断ち切られた、ということの意味します。

しかし、私たちが神の命じられていることを行いたいと願いながら、それができないことについて 7 章で読みました。自分がいかに神の命じられていること、その律法を守ることができないのか、その嘆きをパウロは記しています。そこから分かってくることは、「律法は、私たちがいかに罪深いかを知らせる」ものだということです。自分で神の命じていることを行なおうとすればするほど、ますますそれができないどころか、憎むことを行なっているという事実です。そこで、罪に対する死だけでなく、律法に対する死も必要であることを知りました。つまり、律法の行ないによって生きようとするその生活と関わりを絶つことです。

そして 8 章で、聖化についての最終的な解決が書かれています。それは、新しい原則の紹介です。「キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。(2 節)」御霊に導かれることによって、私たちが罪の性質を宿している肉の行ないを殺すことができる、というものです。私たちが生まれながらに持っている性質は、キリスト者になってもなおのこと残っています。この体に、罪そのものはまだ宿っています。私たちの霊は新しくされたのですが、体はアダムから受け継いだままの状態なのです。

けれども、神はご自身の御霊を私たちに下さいました。そして御霊によってキリストが住んでくだ

さっています。キリストが、私たちの肉の弱さのためにできなくなっていること、律法の要求をみたしてくださいました。ご自分の肉体の上に、神の処罰が置かれました。したがって、律法の要求が満たされたキリストが内におられることによって、私たちの内に律法の要求が満たされたのです。この立ち位置が分かっている人には、神は御霊の導きを与えてくださいます。そして御霊に私たちが自分を明け渡すことによって、肉の行ないを殺すことができます。これが罪に勝利する道、罪から解放されている道です。そこで 14 節に入ります。

1A 子としてくださる御霊 14-17

14 神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。

私たちが御霊に導かれる生活を歩んでいるならば、その人は神の子どもであるとあります。私たちが神の子どもになるということは、つまり神に似た者になる、また、神に従順な者になるということです。アダムが初めに神にかたどり造られたようになる、ということでもあります。そのために、神が信じる者に初めにしてくださったことは、御霊によって新しく生まれさせてくださったことです。「ヨハネ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」

神はまた、私たちを養子縁組にしてくださいました。神の子どもではなく、悪魔の子、神の怒りの子であったところが、神がキリストの血による代価を支払われることによって、私たちをご自分の子として養子にしてくださいました。イエス様は、神の御子です。神の独り子であられ、永遠の昔からその関係は変わっていません。神の御子は神ご自身であられます。けれども、イエス様は復活された後に、マグダラのマリヤに対してこのように語ってくださいました。「わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。(ヨハネ 20:17)」

イエス様が父なる神と持つておられるその関係を、ご自分によって贖われた者たちをも招き入れてくださいました。したがって、私たちは決して神にはなりません、キリストにとって神が父であられるように、私たちもこの方を父と仰ぐことができるようにしてください、この方は私たちにとって長子あるいは長男のようになってくださったのです。キリストに結ばれた者として、この方が父なる神によって歩まれたのと同じように、私たちもその道を歩むようにされたのだ、ということです。「キリスト者」という呼び名の元々の意味は、「キリストのようだ」という蔑称でした。小さなキリスト、とも言ってよいでしょう。この方に付いていく者、この方に倣っていく者ということです。

15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊を受けたのではなく、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。

御霊が初めにしてくださったのは、私たちが神を自分の父として親しく呼ぶことができるようにしてくださったことです。「アバ」というのはアラム語で子供がお父さんを親しく呼ぶ時の言葉です。ヘブライ語でも同じで、イスラエルに行くとき小さな子がお父さんを見て、「アバ」と言っている姿を見かけます。「パパ」とか、「お父さん」というのと同じです。

全知全能の神をどうして、父として仰ぐことができるのでしょうか？そこには、御霊の働きがあります。初めに「人を再び恐怖に陥れるような、奴隷の霊」とあります。これは、罪の奴隷、律法の奴隷ということです。罪によって死がもたらされます。そして律法は違反すれば死ななければいけません。したがって、人々を恐怖に陥れるということです。しかし、キリストはその恐怖から私たちを救い出してくださいました。「ヘブル 2:14-15 そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。」私たちは、漠然とした恐れを持っていますね。自分の命に対する不安や恐れがあり、それによって変な行動を取ってしまうことさえあります。その根本には、自分は神から離れていること、そして死んで、永遠に引き離されるという恐れがあるからです。しかし、キリストがそこから私たちを解放してくださいました。私たち自身が、親しく聖なる神を「お父さん」と呼ぶことができるようにしてくださった、その関係を与えてくださいました。私たちがそこまで主と親しく交わることができます。

16 私たちが神の子どもであることは、御霊ご自身が、私たちの霊とともに、あかししてくださいます。

神の子どもであるであると、確かにさせてくださる働きは御霊がしてくださいます。エレミヤ書の預言には、主は、律法が心に書き記されると仰せになられたあとに、「人々はもはや、『主を知れ。』と言って、おのおの互いに教えない。(31:34)」と言われました。それは御霊が、私たちに教えてくださるからです。使徒ヨハネは、こう言いました。「あなたがたのばあいは、キリストから受けた注ぎの油があなたがたのうちにとどまっています。それで、だれからも教えを受ける必要がありません。(1ヨハネ 2:27)」また、ヨハネはこうも言いました。「このイエス・キリストは、水と血とによって来られた方です。ただ水によってだけでなく、水と血とによって来られたのです。そして、あかしをする方は御霊です。御霊は真理だからです。あかしするものが三つあります。御霊と水と血です。この三つが一つとなるのです。もし、私たちが人間のあかしを受け入れるなら、神のあかしはそれにまさるものです。御子についてあかしされたことが神のあかしだからです。(5:6-9)」御霊が、確かに自分が神の子供であることを証ししてくださるのです。

そして、その証しを知ることができるのは、「私たちの霊」です。自分の知性や思いを超えています。自分の感情をも超えています。確かに、自分は神の子どもなのだという確信と確認は、自分の霊によって知ることができます。

17 もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦

難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。

そして神の子どもであることは、その親密さだけではありません。神が父ですから、その相続者になることも意味しています。イエス様は、父からのものを受け、その全ての祝福を受けておられました。その全ての良き物を、キリストの内にあるということで私たちも受け継ぐことができるようにしてくださいました。「神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。(エペソ 1:3)」そして、それは今、天に蓄えられているとペテロは話します。「1ペテロ 1:4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。」そして、主が戻って来られる時に、キリストのところにいっさいのものが集められ、その御国を受け継ぐようにしてくださいます。「時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。このキリストにあって、私たちは彼にあって御国を受け継ぐ者ともなったのです。(エペソ 1:10-11)」

私たちに、かつてアダムが受け継いだような所有権を神は取り戻してくださいます。アダムは、自分が造られた時に、地に生きている物を支配するように命じられました。そしてエデンの園に置かれて、そこで自分の好きなように木から実のものを食べ、また土地を耕すこともしました。そのエデンの園は、イランの辺りからアフリカに至るまでですから、日本列島よりも広範囲の地域です。そして、連れてこられる動物には、彼は名前を付けました。このように、地上にあるものを支配し、管理し、そこにあるものを楽しむことができるようにされました。ここの命の豊かさがありますね。けれども園の中央に、神は一つだけ食べてはいけないと言われたものがありました。善悪の知識の木からの実です。それを取って食べれば死ぬと言われました。その示すものは、「あなたは神ではない」というものです。アダムがそれだけのものを受けているのは、すべてがアダム自身が神につながっていること、神に拠り頼んでいること、神と交わっていることによります。しかしアダムは後に、神の命令に反して実を取って食べて、罪を犯しました。そのために、彼はこれら神からの分け前を失ってしまったのです。

私たちの人生もアダムと同じです。天地を造られ、自分を造られた神から与えられている良き物がたくさんあるのですが、神ではなく自分自身を求めることによって、それを失っていました。神に従ってさえいれば受け取れるものを、自分を主とし神とすることによって、自分の尊厳、自分の生きる指針、いろいろなものを失いました。そして、霊的な命そのものを失っています。それを、キリストにあって回復します。主からいただくものは数多いものです。そして主が戻って来られたら、私たちは目で見える形で、神の国を受け継ぐことになるのです。

そしてここで、「キリストとの共同相続人であります。」とあります。「共同相続人」という意味は、土地を相続するのであれば、同じ面積の土地を相続するということです。同じものを受け継ぐということです。つまり、キリストが父から相続されるものを私たちにも等しく分かち合うということでもあります。

キリストは父なる神と一つになっておられ、父のものをこの方が全て受け取り、そして私たちの中で長子にもなってください、兄弟としてその父のものを分かち合うということです。私たちが、キリストにあって、神の国を受けるのです。御国においてはキリストが王となっておりますが、私たちが共に統べ治めます。「黙示 3:21 勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

しかしここに、その栄光を受ける、尊厳を受けるための過程が書かれています。「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら」とあります。ここが大事です。私たちがキリストに結ばれた者、キリストにある者となっているということは、この方と同じようになるということでもあります。まずキリストは、ご自分が苦しまれた後に、栄光を受けられました。「ピリピ 2:8-10 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」これと同じように、私たちがキリストの苦しみにあずかり、それから神の栄光にあずかります。「3:9-11 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」そしてこの後に、「キリストにおいて上に召してくださる神の栄冠」と書いてあります。

私たちはどのようにして、その苦しみにあずかるのでしょうか？イエス様は、「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイ 5:5)」と言われました。主は、ご自分が正しい方であるにも関わらず、それを受け入れない者、拒み、迫害する者に仕返しをなさらず、その苦しみを甘受されました。私たちが、この方に従えば、自分の肉体に弱さがある時も、それでも神の御心に自分をゆだねる。また誰かに悪いことをされても、それでも主に裁きを任せて、その人に憐れみを求める。このようにして生きていく時に、主はその柔和さから多くのものを相続させるようにしてくださいます。柔和だということは、単なる優しさのことではありません。自分自身が、全てを主のなされることに身を委ねていくことに他なりません。主の前でへりくだることあります。

ここから 8 章の最後までに、キリスト者が受ける苦しみや迫害に対する神の御心をパウロは取り扱います。

2A 栄光のための苦しみ 18-25

1B 被造物の呻き 18-22

18 今の時のいろいろの苦しきは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

ここで大切なのは、「取るに足りない」という言葉です。私たちが今の時にクリスチャンであるがゆ

えに、いろいろな苦しみを通らなければいけません、将来に啓示される栄光に比べれば、ちりあくたにすぎない、ということです。彼は第二コリントで、こう言っています。「今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。(4:17)」もともと「栄光」には「重い」という意味があります。天秤で今の患難と後の栄光を比べると、すぐに後の栄光のほうの皿が下がる、ということです。

パウロは、今の患難は軽いと言っていますが、彼が受けた患難は並大抵のものではありません。彼は、同じ第二コリント書で、自分が受けた苦難について明かしています。11章23節からです。「彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。(11:23-28)」これらは軽い患難なのです。なぜでしょうか？それは、彼が、将来の栄光の重さと、今の苦しみを比べているからです。

パウロの手紙を読むと、そこには喜びと愛と平安が特徴になっていて、自分がいかに苦しんでいるかについては、あまり言及されていません。コリント人に、今読んだところを話すときも、非常にためらって、仕方がないように語っています。なぜ、パウロは、ひどい取り扱いを受けているなかで、そのような平静を保っていることができたのでしょうか？それは、彼には、後に来る栄光がどのようなものであるかが、はっきり見えていたのです。自分が受け継ぐ神の御国が、いかにすぐれたものかを、聖書から知っていたのです。ここにキリスト者の苦しみに対する忍従、希望と喜びをもって耐え忍ぶ力があります。

19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。22 私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

ここには、神の子どもとして栄光の姿に変えられ、キリストにあってこの世界を共に相続する時に、この世界、被造物自体も元の、神の意図された状態に回復することを意味しています。「神の子どもたちの現われ」というのは、キリストによって栄光の姿に変えられ、それからキリストと共に栄光をもって地上に戻ってくることを意味しています。「私たちのいのちであるキリストが現われると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。(コロサイ 3:4)」

そして、栄光の体をもってキリストと共に現れることを、なぜ被造物が切実な思いで待ち望んでいるのか？それは、栄光の姿から人が落ちた時に、被造物も神の意図された理想の姿から落ちてしまったからです。アダムが罪を犯した時のことに起こりました。主なる神は、アダムに、「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。(創世 3:17)」といわれました。その子孫である人間が呪われただけでなく、自然界も呪われてしまったのです。そのため、地震や火山などがあり、また、動物の間には弱肉強食があります。神は、もともと、そのようには天地を造られませんでした。

けれども、望みがあります。人間が罪を犯して被造物が呪われたように、人間が贖われると土地も贖われるからです。その様子を垣間見ることができるのは、例えばイザヤ書 11 章 6 節からです。「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草を食べ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れた子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである。(11:6-9)」

それで、私たちがこの肉体の中において、その中で呻いているのですが、被造物も呻いています。「産みの苦しみ」とありますが、主は終わりの日についてこの言葉が使われました。「民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、ききんも起こるはずだからです。これらのことは、産みの苦しみの初めです。(マルコ 13:8)」子どもが産まれることは、とても喜ばしいことです。けれども、子どもを産むときに、陣痛が起こります。出産が近づけば近づくほど、陣痛の間隔は短くなり、さらに痛みが増します。出産直前に、その痛みは極みに達しますが、子どもが産まれたのを見て、そのすべての痛みを忘れさせるほどの喜びに包まれます。この被造物全体もそのようなものなのです。大地震が起こり地盤もうめいているのです。これがもっとも破壊されていきます。けれども、私たちは、この世が破壊へ向かえば向かうほど、この出産が間近になっていることを知るので、この希望をもって生きることができます。

2B 体の贖いの望み 23-25

23 そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にしてくださいこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。

私たちのことが、「御霊の初穂」と表現されていますが、これは、私たちが御霊によって新たに生まれたからです。けれども、それはあくまでも初穂の働きしかしておりません。終わりの時には、御霊は被造物全体に働きかけ、すべてを変えてくださいます。

そして、被造物だけではなく、私たち自身の心の中でもうめいています。なぜなら、私たちのからだはまだ贖われておらず、アダムから引き継いだ死んだからだを引きずりながら歩いているからで

す。神の子どもにしてくださったのですが、その栄光の体をもって初めて神の子どもになったと言えます。けれども、まだそれが来ていないので呻いています。私たちのからだは、神によって造られたものなのです。ばらしい反面、とても不便であります。このからだは、いつか朽ちて、ちりとなり、土に帰ります。病を持ち、老いて、自分の思うように動かなくなります。そして、私たちのからだは不便なのは、何よりも罪の性質を持っているからです。私たちの贖われた霊は、地上のものであるこのからだの中にいて、不便を感じています。神の律法を行ないたいと願っているのに、からだに罪の原理があって、したいことをしないようにさせているからです。だから、私たちもうめいていて、このからだを変えられるのを待ち望んでいるのです。

パウロは、コリント人への第二の手紙において、今のからだと、後に与えられるからだの違いについて話しています。第二コリント書五章です。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあつてうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。(5:1-3)」私たちの今の体を、地上の幕屋、テントになぞらえています。そして、天から与えられる体を、神の家になぞらえています。テント生活が、とりあえずは生活できるから必要なのですが、そこでずっと住みたいとは願いません。建物の中に定住したいと願います。同じように、私たちも、新しいからだを与えられて、正真正銘の神の子どもとなり、キリストのようになり、神の栄光を反映したいと願います。今のからだは、一時的なものとしてみなし、うめいているのです。

24 私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。25 もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。

私たちクリスチャンは、キリストが自分の罪のために十字架につけられ、よみがえられたことを信じることによって救われました。けれども、からだの贖いがある初めて救いが完成するのであり、私たちは、将来にからだを贖われることを望まずして生きていくことはできません。主が私たちのために再び来られます。そのときに、私たちは引き上げられて、一瞬のうちに換えられて、新しいからだを身にまとい、主と対面するのです。

そして大事なことが書かれていますね。「目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。」ある人は、人は水なしで一日生きられる、そして空気がなくても一分間、生きられる。望みがなければ一秒も生きられない。私たちは期待し、待ち望みながら生きている者たちです。その望みが私たちを支え、救っています。そして望みは、目に見えるものではありません。大事ですね、目に見えなくても信じるのです。待っているのです。熱心に待っています。主を来てください、と私たちは祈り、また賛美します。